

被災地施設報告書 (2011.04.29)

平成 23 年 4 月 23 日（土）～24 日（日）にかけて、笹岡会長、坪田副会長、宮内が石巻市の“遊楽館”福祉避難所を訪問し、草水さんより現状報告を受けた後 PCAT の Dr.、薬剤師に挨拶した。明日から 20 床の簡易ベッドを設定する予定らしく、打ち合わせをしていた。

翌日、岩手県協会の山舘会長、斉藤副会長と一緒に釜石市と大槌町を訪ねた。

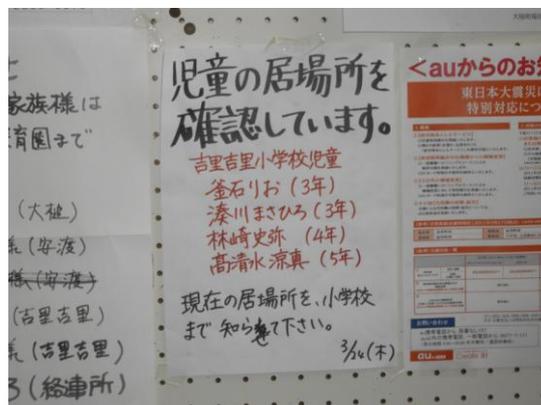


盛岡はこれから桜が咲くところだった。山舘会長の運転で 2.5 時間の山道は残雪の合間に蔭のとうが顔をだし、新緑が眼に映えた。だが大槌町に入ったとたん情景は一変した。そこに町があった証拠は、瓦礫の間の道だけという光景は想像を絶するものだった。

大槌町は人口 16,031 人。町が壊滅状態だった。特に町長や役職者などリーダーになる人が亡くなり、役場機能が働いておらず、岩手県の職員が応援にきていた。最近まで“行方不明者 0”という表示がだされたのも、わからないからだという。

岩手県社会福祉協議会の人のお話では、2 週間前の情報で 36 避難所あるが、ニーズは自宅の泥だし、片付け、炊き出しが多く、医療の中心は、県より派遣の保健師が担っていた。

大槌町地域包括センターの保健師から話を聞くと、状況はさらに深刻度をました。「大槌町は庁舎が流され職員がほとんど亡くなり、他の場所から派遣で来ているので、資料がなく、1 から作り上げていると



いう。今後、災害救助法で一時入院した人が退院しても帰る所がない。「何をして欲しいのか見極められないが、スタッフと一緒に行動できる人が欲しい。」と涙ながらに切願っていた。津波は高台にあるこの石垣まで迫ったが、土を石灰で消毒され、桜は満開だった。

次に訪ねた釜石市は人口 42,370 人、その内 13,000 人が高齢者。釜石市社会福祉協議会の所長は「61 避難所がある。仮設住宅ができて、今後は心のケアが大事になる。この地域は、元より自殺率が高い地域。

今回の災害で家族、仕事、家を失い、心の傷を負った人が沢山いる。一人残して、皆、津波に持

っていかれた人もいる。この人たちはいつまで頑張ればいいのか。先が見えない中で将来を悲観して亡くなりほしくないか心配。常に寄り添う人が欲しい。」と言っておられた。

往復 5 時間かかる大槌町のように、被災地までの交通手段が悪い所はそうでない所に比べて、食糧はじめ支援が手薄になっている印象を持った。また、支援している職員自身の疲弊が激しく、我々に話す間も声を震わせて、ソーシャルワーカーの支援を切望していた。

当協会に寄せられた期待は大きいですが、単独で支援するには課題山積。迅速に対応できる継続支援体制の構築が急務と実感した。

笹岡真弓、坪田まほ、宮内佳代子